

特集：変わりつつある公園のかたち vol.5

～事例：東遊園地（神戸市）～

東遊園地について

東遊園地は、神戸の中心部に位置する2.7ヘクタールの都市公園です。

1868年に神戸居留地の外国人が使う、日本初の西洋式運動公園「外国人居留遊園」としてその歴史がはじまりました。居留地に隣接したこの公園では、サッカーや野球、ラグビーなど、多くのスポーツが外国人によって生まれ、西洋のスポーツが日本に広まる起点となりました。また、神戸倶楽部や神戸レガッタ&アスレチッククラブが拠点を置く、外国人の社交の場でもありました。

公園内には、さまざまな記念碑が置かれていましたが、1995年の阪神淡路大震災以降はレミナリエや1.17希望の灯など追悼行事の会場となり、犠牲者を追悼する慰霊モニュメントが設置されるなど、震災の記憶と結びつくようになりました。

地理的にも歴史的にも神戸の中心であり続けた東遊園地は、いま市民のライフスタイルの中心として、新しい輝きを放とうとしています。

東遊園地HPより抜粋

東遊園地再整備の経緯

■東遊園地パークマネジメント社会実験

2015年に、村上豪英氏が事務局長を務める「神戸パークマネジメント社会実験実行委員会」が主体となって、「東遊園地パークマネジメント社会実験」が2回実施されました。「URBAN PICNIC」という名称で、「都心と自然を同時に楽しむ」というコンセプトを設定したうえで、園内の広場を屋外図書館に見立てた「アウトドアライブラリー」と、神戸市内の農産物を扱う「ファーマーズマーケット」が実施されました。

翌年の2016年には、村上豪英氏が代表理事を務める「一般社団法人リパブルシティニシアティブ」が代表事業者となって、「URBAN PICNIC」が4ヵ月半にわたって開催されました。

いずれの社会実験においても、広場の芝生化実験が行われ、その結果は設計に活かされました。

■Park-PFI(公募設置管理制度)の導入

神戸市は「にぎわい拠点施設」の整備に際して、Park-PFI(公募設置管理制度)を導入しました。2019年に民間事業者の公募があり、㈱村上工務店、一般社団法人リパブルシティニシアティブ、㈱ティーハウス建築設計事務所で構成されるグループが選出されました。

公募対象公園施設である賑わい拠点施設の「URBAN PICNIC」と、その前にある芝生ガーデン及び周辺が特定公園施設となっています。

表 東遊園地再整備の主な取り組み経緯

2015年	社会実験1回目(6月) 実施主体:神戸パークマネジメント社会実験実行委員会
	社会実験2回目(10～11月) 実施主体:神戸パークマネジメント社会実験実行委員会
2016年	社会実験3回目(6～11月) 代表事業者:一般社団法人リパブルシティニシアティブ
	再整備基本構想(案)策定
2018年	再整備基本計画(案)策定
2019年	東遊園地にぎわい拠点施設運営事業者(Park-PFI制度を活用した民間事業者)の公募・選定 選定業者:㈱村上工務店(代表企業)、一般社団法人リパブルシティニシアティブ、㈱ティーハウス建築設計事務所 ・公募対象公園施設:URBAN PICNIC ・特定公園施設:芝生ガーデンなど
2020年	再整備基本設計策定 設計業者:公園マネジメント研究所・エス・イー・エヌ環境計画室・空間創研設計共同体
2022年	再整備実施設計策定 設計業者:公園マネジメント研究所・エス・イー・エヌ環境計画室・空間創研設計共同体
2023年	南側エリアで「こども本の森 神戸」開館
	東遊園地リニューアルオープン(4月7日)

(参考:東遊園地再整備基本構想、東遊園地再整備基本設計報告書、神戸市HP等)



▲東遊園地平面図(出典:「URBAN PICNIC」のHPに掲載されている図に一部加筆)

東遊園地についてインタビュー

令和5年9月8日(金)、一般社団法人リパブルシティニシアティブの岩田晶子氏、株式会社公園マネジメント研究所の恵谷真氏、株式会社エス・イー・エヌ環境計画室の津田主税氏、株式会社空間創研の泉崇氏、設計協力会社のこばやし事務所の小林和子氏の計5名に、東遊園地での取り組みや設計の考え方についてのインタビューを行いました。

◆東遊園地でのマネジメントの経緯

東遊園地のマネジメントの経緯としては、村上豪英氏が大きなイベント時以外には閑散としていた東遊園地が、市民に日常的に利用されるようになれば、都心全体にとっていいことになると考え活用を提案。まずは社会実験ということでURBAN PICNICがはじまりました。社会実験はまず実行委員会形式で2015年に2回実施しました。村上豪英氏にとって公園での社会実験は東遊園地が初めてのことでした。6月の社会実験では、北側の広場の一部を芝生化してカフェと屋外図書館を設置しました。10月～11月の社会実験では加えて公募プログラムも実施しました。

その後2016年には、社会実験で芝生の上で賑わう市民の風景を共有した神戸市から委託という形で、一般社団法人リパブルシティニシアティブが主催団体となって社会実験を4ヵ月半にわたって開催しました。一般社団法人リパブルシティニシアティブは社会実験を契機として2016年に設立された団体で、村上豪英氏が代表理事を務め、理事には東京農業大学の福岡孝則准教授や神戸大学の槻橋修教授といった学識経験者もいる団体です。

その後、東遊園地は再整備され、Park-PFI事業者として東遊園地に関わっています。

◆マネジメントで大事にしていること

Park-PFI事業で整備された賑わい拠点施設「URBAN PICNIC」は一般社団法人リパブルシティニシアティブが管理運営しており、その他の区域は神戸市が管理しています。「URBAN PICNIC」の前にある特定公園施設の芝生地は一般社団法人リパブルシティニシアティブがPark-PFIの企業グループとして整備し、運営管理をしています。

マネジメントにあたっては、公園の価値を高めるにはどうしたらいいかということと考えながら運営しており、三宮にこういう場所があったらいいなという場所を目指しています。公園の価値を高めることを大事にしているため、「URBAN PICNIC」内にあるレンタルスペースは、公園らしい使い方をしてくれる方に貸し出すようにしています。

◆再整備設計において大事にしたこと

細かな高低差を無くし一枚の地盤にすることで、見通し良くどこからでも入れて通れるオープンな公園にすることや、歴史ある公園の資産を評価・整理し、再配置することで、その良さを伝えることなどを大切にしています。



▲インタビュー後の集合写真



▲社会実験の様子



▲にぎわい拠点施設「URBAN PICNIC」



▲特定公園施設の芝生地



▲歩道側の様子

◆その他設計に関すること

《北東側エントランスの水景》

北東側エントランスにある水景は、人が楽しんでいる風景を見せることによって公園の中に入ってもらうように、駅から歩いてくる人から水景の賑わいが見える位置に配置しています。また、異常高温対策という機能性も兼ねています。



▲北東側エントランスの水景

《異常高温対策》

異常高温対策については市から要望もありました。北東側エントランスの水景の他、ミスト装置や園内の一部舗装下には試験的に雨水貯留砕石路盤を導入しています。



▲ミスト装置

《軽量化》

東遊園地北側エリアの地下は市立駐車場があり、現在デッキがある「見晴らし広場」のあたりは駐車場に出入りするためのランプがあり、地盤の高さを変えられないなど、設計上の制約がありました。また、駐車場の上の部分は荷重の制約があり、一部には軽量盛土を設置するなどして対応しています。

《歴史的なもの》

東遊園地は居留地の外国人が利用する日本初の西洋式運動公園として整備されました。その後、外国人が利用していた施設類を磯上公園に移して、日本人が利用できる公園になった経緯があります。敷地形状が今日まで残っており、東遊園地は国の登録記念物に登録されています。

フラワーロードのところにかつて生田川が流れていましたが、約150年前に現在の流路に付け替えられました。生田川のあった記憶の継承として歩道沿いに小川が整備されており、公園内には他に「かのうばし」と記された石柱があります。



▲「見晴らし広場」にあるカウンターテーブル



▲西側エントランスの壁面に描かれた「居留地計画図(1870年)」

《芝生》

芝生は夏芝と冬芝を混ぜて、年中緑の芝生が楽しめるよう整備しています。

芝生の品種の決定に際して、神戸市は社会実験を行い、多種の品種、土壌改良材、芝生保護材の有無などの中から、回復性に優れ冬芝との相性の良いティフトン芝になりました。

◆再整備設計とPark-PFI事業とのすり合わせについて

公園全体の再整備設計とPark-PFI事業が同時並行的に検討されていましたが、広場の作り方において特に乖離がありました。

例えば、再整備設計では特定公園施設のところは舗装にするプランでしたが、イベント開催で芝生が閉鎖されることが考えられるので、もう1箇所芝生地(特定公園施設の芝生地)を設けることになりました。園路幅も芝生との距離を大事にした幅員になりました。社会実験において、どういふ芝生でどういう配置だと人が集うかを実験で確認していたことが活かされました。

社会実験でどういふ姿を目指したいかが見えていたことは、公園全体の再整備設計を考えるうえでとても役立ちました。

公園全体の再整備設計にあたっては、Park-PFI事業とのすり合わせだけでなく、三宮からのフラワーロード(税関線)とのデザイン調整もありました。舗装材のサンプルを東遊園地再整備検討委員会の先生方に確認してもらうなどして検討し、公園と歩道が一体的になったのはよかったことだと思っています。



▲園路と芝生

◆管理運営にあたっての市とのすり合わせについて

管理運営にあたっての神戸市との意見交換は、1週間ごとに書類で、1ヵ月ごとに対面で実施しています。貸し出し予定の場所に草刈りが入って貸せない時があったりしますが、管理における意見のすり合わせはうまくできています。

芝生の管理においても、芝生が全面的に利用できない環境にしないなど、神戸市が拠点施設の営業を考慮して、調整してくれています。



▲北西エントランスの壁面緑化

◆リニューアル後の利用の変化

社会実験を実施した場所は元々土舗装で、隣接している市役所のグラウンドのような場所でした。社会実験を行っている時は、まちを良くする仕掛けづくりに興味がある人が来ているイメージでした。

リニューアル後は色んな人が訪れており、どこからどういふ人が来ているかは把握できていない状況です。

東遊園地では小学生や中学生の利用があまり見られないということがありますが、周辺の市街地には東遊園地の他に、みなの森公園、磯上公園、小野浜公園があり、うまく機能分けされています。例えば、スケートパークなどがあるみなの森公園は若者の利用が多いという特徴があります。



▲アウトドアライブラリー

◆リニューアル後の街・人の流れの変化

一般社団法人リパブルシティニシアティブはまちの魅力化を進めており、その中に公園があるという位置づけをしています。

東遊園地を目的に来る人はあまりいなかったのですが、社会実験の時は東遊園地が目的になることを目指していました。再整備後は東遊園地を目的に来る人が見られるようになってきました。神戸市は、海側にあるKITOまで人の流れが伸びていくことを考えているそうです。

東遊園地の周辺エリアの飲食店は、以前より賑わっているように見えます。他にも要因はあると思いますが、周辺エリアの不動産の価値も上がっているようです。



▲くつろぎベンチ

◆東遊園地のマネジメントにおける将来展望

「公園でありながら“まち”の一部」、「公園でもある街路でもある」、そういう場であることをこれからも目指していきます。

村上豪英氏は「URBAN PICNIC」と南側エリアにある「こども本の森 神戸」、公園外の海側にある「KITO」の3施設が“まち”の拠点となるように連携していきたいと考えています。

また、大丸百貨店などの商業施設や神戸市立博物館などの文化施設とも繋がる施設とのつながりを創ってきたいと考えています。特に旧居留地とは歴史とともつながりの深い場所なので、東遊園地で何かできたらと思っています。



▲エントランスに掲示されている東遊園地のマネジメントへの思い

神戸都心の結節点でもある東遊園地を、アウトドアリビングとして、日ごろから、もっと楽しく、もっと大切に使えたら、まち全体がもっとすてきな場所になるのではないかと。そんなことを考え、2015年から「URBAN PICNIC(アーバンピクニック)」と名づけた社会実験を行いました。多くの市民の想いが実り、2023年4月、公園全体のリニューアル工事が完了とともに、カフェやレンタルスペースを備えた施設がオープンしました。東遊園地を大学のキャンパスのように使って、さまざまなコトが生まれ、みんなのサードプレイスへと育っていくことを願っています。

(引用:エントランスに掲示されている東遊園地のマネジメントへの思いの文言)

取材・編集・構成 荘田 隆久、増田 将典、下村 莉子、友國 慎也